

Title	アーサー・オショネシー マラルメの「ゴシップ」 『アシニーム』 1875-1876(翻訳)
Sub Title	<<Les gossips de Mallarmé>>, extraits de l'Athenaeum 1875-1876, traductions libres en anglais par Arthur O'Shaughnessy (traduction)
Author	原山, 重信(Harayama, Shigenobu)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2010
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.51 (2010. ) ,p.47- 69
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20101018-0047">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20101018-0047</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アーサー・オショネシー  
 マラルメの「ゴシップ」『アシニーアム』  
 1875-1876 (翻訳)

原 山 重 信

1. 1875年6月26日土曜日

文学ゴシップ

p. 857. ステファヌ・マラルメによるポーの『大鴉』仏訳が、エドゥアール・マネのオリジナル挿絵を付して、フォリオ版でパリのリシャール・レスクリードによって先頃出版された。英詩は、仏訳と対訳の形で置かれている。挿絵は非常に風変りな性格を有しており、同じ芸術家〔エドゥアール・マネ〕によって（と我々は信ずるのだが）なされたシャルル・ボードレールの一風変わった肖像を幾分我々に思い起こさせる<sup>1)</sup>。

1) このメモと次の2つのメモのオリジナル・テキストは発見されていない。

2. 1875年9月4日土曜日

文学ゴシップ

p. 305. (a) ステファヌ・マラルメ氏は、ベックフォードの傑作、『ヴァテック』を、1787年にパリで初めて出版されたように、元のフランス語版でページごと、行ごと編集している。それはエルゼヴィル活字体で、特別な用紙に印刷された豪華版になるだろう。原稿は番号を付せられ署名入りで、編者による序文が前に置かれる。大抵のイギリス人によく知られているこの名高い作品にまつわる関心は、我々が考えるに、多くの人を引き付け、元の言

語と形でそれを知るようになるのに十分なほど依然として強く、間もなく出る再版は、フランス文学に、忘れ得ぬ最も奇異な書を蘇らせることとなろう。出版者は国立図書館の司書<sup>1)</sup>アドルフ・ラビット氏で、この書は10月に出版することになっている。

- 1) オシヨネシーは、恐らく « libraire » という語を [‘librarian’ と] 誤訳したのであり、‘bookseller’ (書籍販売業者) とすべきであった。後出 p. 85 [翻訳では p. 54] にも同様の誤りがある。

### 文学ゴシップ

(b) G. フローベール氏は、田舎暮らしの小説に没頭している。この小説は誰から聞いても、むしろこのような作品（それらが一般にそうであるように、興味をそそる挿話に頼る）の通常の様式とは対照的なものとなるだろう。フローベール氏の目立った特徴は、ふつう挿話と呼ばれるものが全くないということだ。『サランボー』[1862]の作者は今や、田舎町に埋もれ、自身冒険や娯楽にほとんど疲れ果てた二人の男の物語<sup>a)</sup>に美学的関心を寄せるといふ、独創的で聊か困難な仕事を自らに課したように思われる。

- a) 1880年、作者の死によって未完に終わった『ブヴァールとベキュシェ』のことである。

## 3. 1875年11月6日土曜日

### 文学ゴシップ

p. 611-612. (a) 先頃亡くなったジュール・ド・ゴンクールによるエッチングのコレクションが兄のエドモン・ド・ゴンクールによって出版されようとしている。各巻の本文はビュルティエ氏<sup>a)</sup>によって書かれることになるだろう。特にフランスでは、作家たちのデッサンに特別な興味がこれまでいつも伴ってきており、実際、芸術的表現が可能な心像と観念が、言語による表現の源泉に当面先行している文学芸術家に、どんな程度の明快さで浮かぶのかわえるのはためになることだ。凡そ1年前、ヴィクトル・ユゴー、ボード

ルール、ゴーチエ、そしてシャンフルーリによるデッサンが掲載された或るアルバムには、ジュール・ド・ゴンクールの自画像も載っていた。だから公衆は、『ジェルヴェゼ夫人』〔1869〕や『妹フィロメール』〔ママ<sup>b)</sup>〕〔1861〕などの作者の才能が、多くの点で、そのエッチング画家〔ジュール・ド・ゴンクール〕の才能といかに似ているのかを、今初めて告げられる必要はないのである。

- a) フィリップ・ピュルティー (1830-1890) 美術作家。マラルメの友人。  
 b) 正しくは「フィロメーヌ」。

### 文学ゴシップ

(b) 「長編小説」と「短編小説」の季節が、パリでは新刊と再版と共に始まる。『パリの奥方たち』〔1875〕は、或る詩人の手によって特別な価値を獲得する半ば物語、半ば新聞記事のこれら幻想的作品集で、この場合、その詩人というのは、『口づけ』〔1872〕と『ハーレム』〔1874〕の作者のエルネスト・デルヴィイ氏<sup>a)</sup>である。『月曜物語』が既に読者層に知られており、その物語の若い著者は、今はメモの書き手で、早くからチャールズ・ディケンズの注意を惹いた。〔アルフォンス・ドーデの<sup>b)</sup>〕元の本のページに今や『或る〈不在者〉の手紙』〔1871〕のうちの幾つか（そこから政治は注意深く削除されている）と、全季節で、夏でさえも読まれ得る種類の3つの「クリスマス物語」が加わる。シャルパンティエ社は、その最初の成果として、これら2冊の書を提供し、同時に必ずやその作家の偉大な小説になるだろうもの、ゾラによる『ウージェーヌ・ルーゴン閣下』〔1876〕を出すことにしている。これは広範囲に互る風俗の研究の連作となるだろう。既に『ルーゴン家の運命』〔1871〕、『饗宴』〔1872〕、『パリの胃袋』〔1873〕、『ブラサンの征服』〔1874〕、『ムーセ〔ママ<sup>c)</sup>〕神父の過ち』〔1875〕がその中に含まれる『ルーゴン・マッカール家、第二帝政下における一家族の自然社会史』であり、そのうち傑作は『饗宴』と最後に挙げられた作品〔『ムーセ〔ママ<sup>c)</sup>〕神父の過ち〕である。ゾラの名声は、既にロシアにまで広がっており、ここではフランスとほぼ同じくらいよく読まれている。イギリスは、既に多作になっているこの作

家の作品のうちいずれかは知るべきである。

- a) エルネスト・デルヴィイ (1839-1911) 詩人、作家で、『最新流行』の文学面の共同執筆者の一人である。『文学共和国』にも第2号から協力している。
- b) フランス語原文を見ると歴然であるが、こうした重大な欠落がある。
- c) 正しくは「ムーレ」。

### 文学ゴシップ

(c) 『テオドール・ド・バンヴィル全詩集』のエルゼヴィル復刻版は、その1冊が不定期に刊行されるのだが、その版のこの上なく優れた外形と活字からだけではなく、各巻が新しい内容を含んでいるという事実からも注目に値する。それ自体〔ヴィクトル・ユゴーの『東方詩集』との〕刺激的な対照を暗示する『西方詩集〔西洋の女たち〕』〔1875〕という表題の下、シリーズへ新たな追加がなされようとしている。それは全ての『新綱渡りのオード集』〔1869〕と、このフランス的賑やかさと叙情性の噴出の後、二組の全く新しい詩篇を含むだろう。その二組とは、『亡命者たち』〔1857〕の出版以来書かれてきた『黄金の脚韻』〔1875〕と、ド・バンヴィルがヴィヨンのバラードとトリオレを復権したのと同様に、恐らく復権させるであろうシャルル・ドルレアンの古い叙情的なリズムをもった一連の試みである『ロンデル』〔1875〕である。詩人はまた2つの韻文劇作を書き終えようとしている。

### 芝居ゴシップ

p. 618. (c) パリの芝居愛好家たちは、過日我々が取り上げたラフォレ氏<sup>a)</sup>の企画「フランス正劇」の進展を興味をもって見守っている。パリの劇場の殆どが占拠された結果、ラフォレ氏は一時的にアテネ座に退いてここを拠点とせざるを得なかった。この劇場が狭いため、当面のプログラムの変更を余儀なくされ、オーギュスタン・ティエリー<sup>b)</sup>による『アンリ八世』、コペの『ド・マントノン夫人』〔1881年初演〕、そしてカチュール・マンデスの『母親は敵同士』〔1882年初演〕のような演目は延期されることになった。最後に挙げられた作者〔カチュール・マンデス〕による作品『正義』〔1877年初演〕

とマラス<sup>c)</sup>の『敷居の番人』が開演の演目として公表されている。ヴィクトル・ユゴーの一幕悲劇『剣』は、彼の資料の中にまだ残っているもう一つの短編作品『祖母』〔1886〕と同様、予告されていたにもかかわらず、当面上演が望めなかったようである。

- a) ラフォレ氏。氏名生没年不詳。若い劇作家たちを集め、「フランス正劇座」を開設。
- b) ジルベール＝オーギュスタン・ティエリー（1840-1915）偉大な歴史家の甥で、自身も歴史家にして小説家。『文学共和国』に協力することになる。
- c) ジャン・マラス（1837-1900）時には「エミール」というファースト・ネームも用いた。コペやマンデスと同様、マラルメの近い友人であった。

#### 4. 1875年11月13日土曜日

##### 文学ゴシップ

p. 642. (a) ヴィクトル・ユゴー氏による新たな出版は、たとえ数ページのものであっても、必ず注意を引く。彼は最近、亡命時代に関する幾つかの論文を『喚起<sup>ラベル</sup>』紙に書いてきており、今度は「亡命とは何か」と題する小冊子<sup>・</sup>を出版する。これは、それ自身「亡命以前」の続編であり、「亡命以後」の前に置かれている「亡命時代」への序文となるであろう。詩人が今や祖国に帰って、全て本物の詳細をもって、彼の人生の諸々の出来事を自身で物語る。これらの書のお蔭で、後代の人々は、偉大な男の人生の詳しい知識に関して、これまでよく見られたように、曖昧さや誤りに晒されることはなからう。

##### 文学ゴシップ

p. 643. (b) 『文芸生活』〔1875-1878〕なる表題で、新しい文芸新聞がパリにおいて例外的な状況の下、発刊されようとしている。コリニョン氏<sup>a)</sup>は、1864年と1865年に短期間しか続かなかった『新評論』誌のかつての編集長で、退職後、『スタンダールの芸術と人生』〔1868〕および『ディドロ』〔1875〕を書いてきたのだが、それから復帰して、周囲にもう一度昔の寄稿者を総動員している。そのうちの殆どは、この10年の間に文学的名声を得

るか増すかしている。そして彼は今や、同じスタッフで、当初あれほど唐突な結果に至った事業を再開しようとしている。第1号にはサント＝ブーズとテーヌ氏によるこれまで未発表の記事が掲載される。

a) アルベール・コリニョン (1839-1922) 法学者。マラルメのデビューに貢献した人物。

(c) ジュール・クラルシー<sup>a)</sup>氏は、戯曲『ミユスカダン』〔1874〕により名声を博したことでまだ記憶に新しいが、『9月4日の物語』を今日まで継続しようとしている。同じペンになる記念碑的な作品、『J. B. カルポー 1827-1875』〔1875〕——フランスがちょうど喪ったばかりの偉大な彫刻家の人生——も早速関心を集めている。この小冊子は、クラルシー氏による立派な文学的・芸術的伝記の魅力的なミニチュア・シリーズに、もう一つを加えるだろう。そしてその作品の正確なカタログを含めて、カルポーの経歴の研究のために必要な殆ど全ての素材がその中に収められるだろう。

a) ジュール・クラルシー (1840-1913) 多作の著述家。コメディエー＝フランセーズの総支配人として、数多くの名優を育て、新進作家を世に送った。『文芸共和国』に協力することになる。

#### 芸術ゴシップ

p. 647. (d) 美術学校におけるバリー<sup>a)</sup>の作品展の開会式が、翌月曜日の今月15日に催されるだろう。

a) アントワヌ・ルイ・バリー (1795-1875) 動物画家。彫刻家。

#### 芝居ゴシップ

p. 649-650. (e) <sup>きた</sup>来るべきアメリカ独立100周年祭を記念する劇作品のために、テオドール・ミカエリス氏によって開かれた「コンクール」に関してニュースが我々に届いている。100作品が国際局に送られてきているが、そのうちのかなりの数が予備委員会によって、既に優秀と称されており、第1回審査委員会が数日中に招集されるだろう。当選作品が直ちにフィラデルフ

イアに送り届けられ、そこで翻訳されるだろう。このコンペの結果について、いろいろな噂が勿論広まっているが、それはまもなく明らかになるだろう。その賞は、来月の早い時期の間に授与されることになっている<sup>1)</sup>。

- 1) 恐らくマラルメの手になるものではないが、後に彼によってコメントされるこのコンクールに関わるこのテキストの原本を、我々は所持していない。

## 5. 1875年11月20日土曜日

### 文学ゴシップ

p. 675. (a) その偉大な作家の死によって中断された作品、ミシュレの『19世紀史』[1872-1875]の第2巻と第3巻が、まもなく刊行との告知がされている。第1巻は、「ボナパルト家の起源」であり、今度の巻は「ブリュメール18日まで」と「ワートルローまで」である。これらの巻の刊行は勿論、『フランス史』[1833-1844]と『フランス革命史』[1847-1853]という表題の下、ほぼ20世紀に亙る歴史を扱ったその偉大なシリーズを締め括るに違いない。

(b) パリの現世代の若手詩人たちの首領の地位にいると見なされている『現代高踏派詩集』の創始者であるカチュール・マンデス氏が、この冬、1863年から1875年にかけての叙事詩と抒情詩の初期全作品集を出版するだろう[1876]。これまでに未刊行だった『真夜中の太陽、超自然的・北方の詩』と、幾らか残部僅少となった彼の処女作『フィロメラ』[1863]、最近刊行されたが既に入手し難い『叙事詩的物語』[1872]と『エスペリユス』[1872]、そして批評誌と芸誌の読者に多かれ少なかれ知られている『セレーナーデ』、『物悲しい夕べ』という二集が含まれる。

### 文学ゴシップ

(c) よく知られた愛書家にして、パリの国立図書館の司書<sup>1)</sup>であるアドルフ・ラビット氏の元で、『ヴァテック』のフランス語版が、ステファヌ・マ

ラルメ氏による序文を付して、まもなく出版されるかもしれない。これは過日我々が取り上げたが、その氏が12月20日に月刊報告『我が図書館』という彼の手を通る全ての稀で重要な書物のカタログの出版を開始するだろう。これは必ずや、ラビット氏の経験と広い知識から、既に存在するような蒐集家の重宝するものへの非常に貴重な追加となるであろう。

1) 前出 p. 80、註1) 参照〔翻訳では p. 48〕。

(d) パリのシーズンの開幕に現われた多数の出版物のうちで、この冬を通じて流行しそうなものは、フィクションに関しては、アルセーヌ・ウーサー<sup>a)</sup> (彼の『パリの千一夜』の第4巻〔1875〕も始めた) による『ダイアナたちとヴィーナスたち』〔1875〕、表紙にカルポー (恐らく彼の最後のスケッチ) によるこの上ないデザインと、ジョルジュ・サンドの序文が付いた『ヤグルマギク』〔1875〕 (この書は、上流社交界の婦人ギュスターヴ・フウ夫人を隠す偽名ギュスターヴ・アレル<sup>b)</sup> による)、シャンフルーリの本物のエスプリとユーモアの本『学術的喜劇』〔初版1867〕、ロベール・アルト<sup>c)</sup> による『ベアトリックスの物語』、エクトール・マロ<sup>d)</sup> による『世界の旅籠屋』の新しい巻『チェンバレン大佐』である。『家族の文学』への寄稿も取り上げられるだろう。即ち、ポーリーヌ・L\*\*\*、或いは小説家の妻ルイ・ユルバック<sup>e)</sup> 夫人による、『フィガロ』紙に昨夏部分的に出た『母親の書』である。

- a) アルセーヌ・ウーサー (1815-1896) 文人。コメディエール・フランセーズの支配人。
- b) ウィレルミーヌ・ジョゼフィーヌ・シナモン。ギュスターヴ・フウ (1836-1884) と結婚し、「ギュスターヴ・アレル」というペン・ネームで文筆活動。
- c) ロベール・アルトはシャルル・ヴィウ (1829-1896) の偽名。『文芸共和国』の協力者となる。
- d) エクトール・マロ (1830-1907) 小説家、批評家。『家なき子』(1878) の作者として名高い。
- e) ルイ・ユルバック (1822-1889) 小説家。『フェルネル夫妻』(1860) が好評を博した。

(e) ド・バルザックの最終巻に相応しい補遺版は、彼の青年時代の作品と長

く知られていなかったその他の著作を取録して、あの偉大な小説家の書簡集になるだろう。ミッシェル・レヴィ氏兄弟を通じて、フランス内外を問わず、ド・バルザックによって書かれた書簡や興味深い資料の全所有者に対して、今や請願が出され、蒐集ができる限り完全であるために、それらの現物か本物のコピーを公開するように求められている。

(f) E. キネー氏の未亡人が、その作家の偉大な遺作の証拠書類を訂正している。ルイーズ・コレ夫人 [ママ<sup>a)</sup>] によるこの作家の伝記的介绍も出版されるところである。

a) ルイーズ・コレ (1810-1876) 南仏エクス＝アン＝プロヴァンス出身の女流詩人。美貌のため数々の浮き名を流す。とりわけフローベールに最も美しい書簡を書かせたことで知られる。[ママ] となっているのは、« Collet » という誤植のためである。正しくは « Colet »。

## 6. 1875年11月20日土曜日

### 芸術ゴシップ

p. 679. (a) アロンジェ<sup>a)</sup>の最も熱心な生徒の一人であり、今や自身が一般に認められた美術教師であるカール・ロベール氏<sup>b)</sup>による『木炭画の方法』が、パリで出版されようとしている。アロンジェの作品は今や、現物によってのみならず複製を通じてよく知られており、この芸術的パルナッソスへの一見容易な道に対して全く新しい風合い、巨匠自身の鍛錬に裏打ちされモデルによって例証された「方法」を創り出して、恐らく愛好家たちに歓迎されることは間違いないだろう。ロンドンのルシュティエ氏とバルベス氏はそれをこの国で翻訳出版することを提案している。

a) オーギュスト・アロンジェ (1833-1898) 画家、挿絵画家。木炭画が有名。  
b) カール・ロベール ジョルジュ・ムスニエの偽名。美術に関する教科書を数多く出版。

## 芝居ゴシップ

p. 683-684. (b) より際立って文学的で芸術的な聴衆を楽しませた後、ロッシ<sup>a)</sup>は今や、イタリア座のありふれた観客である上流社交界の人々が戻ってきたことによって、パリにおいてはその語の最も厳密な意味において売れっ子である。彼の最初の上演のシリーズは、純粹にシェイクスピアのものであったが、最近彼の社交界の聴衆の好評を勝ち得たのは、元来フレデリック・ルメートルのために書かれたアレクサンドル・デュマ〔・ペール〕の『キーン』〔1836〕によってだった。しかしながら、彼は久しくイギリス作品のレパートリーをやめない。というのは、『マクベス』、『コリオラヌス』そして『ヴェニスの商人』の後、彼はフランスの舞台では全く未知のものである、バイロン卿の『サルダナパルス』に劣らない意外なものを企て、アルフィエリの『オレステス』によってこの高級芸術劇の例外的なシーズンを終える目論見なのだ。

a) エルネスト・ロッシ (1827-1896) イタリアの悲劇俳優。シェイクスピアものを得意とし、舞台芸術復興の旗手となった。

## 7. 1875年11月27日土曜日

## 文学ゴシップ

p. 709. (a) レオン・クラデル氏<sup>a)</sup>は、ケルシー地方の舞台と典型的の生きた再現を含む書に仕上げの一筆を加えている。『ル・ブースカシエ』〔1869〕と『聖バルトロメ = ポルト = グレーヴの請願祭』〔1872〕に、新しい物語が表題になっているように、『クロワ = オ = ブーの男』〔1878〕がまもなく加えられるだろう。我々は、この作品の校正刷りにざっと目を通すと、著者が彼の文体の豊かさの何物をも彼の主題の素朴さのために犠牲にしてはこなかったが、一方、方言の語彙に関して自分自身を最も効果的に役立たせ、その方言の資源は、偉大な作家の手になると、今も尚、ラブレーの時代にそうだったのと同じくらい新鮮で痛快であるとはっきりと述べることができる。クラデル氏

は、その新版がこの冬に出ると予告されている最新の書『物乞いたち』〔1874〕の中の一物語である「モン・トバン、君は彼を知らないのだろうか」における一場面を描いた大きくて素晴らしいエッチングを、この国のルグロ氏<sup>b)</sup>からちよと受け取ったばかりである。

- a) レオン・クラデル (1835-1892) 地方の小説家。『滑稽な殉教者たち』(1862) は、ボードレールの序文を得て、名高い。生涯マラルメの近しい友人であり、『文芸共和国』に創刊号から関わった。
- b) アルフォンス・ルグロ (1837-1911) 画家、彫刻家、エッチング画家。ボードレールに称賛される。後にロンドンの大学に勤めた。

p. 710. (b) 先週我々によって取り上げられたエドガール・キネーの遺作のタイトルは、『亡命者の書』である。それは先週の土曜日にダントゥによって出版されたが、著者が生前書いた短いが頗る痛ましい序文が付されている<sup>1)</sup>。

- 1) この詳細は、1875年11月21日の書簡で、マラルメによってオショネシーに伝えられた。(前出、p.32、註5) [ページは原註のまま]。

### 芸術ゴシップ

p. 717. パリの官展の管理が託されている当局は、3年に1回だけ展覧会を開催するという提案を拒絶することを決定し、現在の慣行を続け、5年ごとに回顧展を開いて、各芸術家によって寄せられる作品の数を二点に限ることを決議した。ファーストネームの付された申し込みは拒絶されるべきであるというのは当然のことであった。したがって、その事実を喜ぶ必要は殆どない。回顧展という考えは非常に素晴らしいものである。こうして決議された蒐集は、最初の決議に従って、その年に相応しい蒐集に追加になるだろうと我々は理解する。寄せられる作品の数を制限することは、フランスの美術により高い関心が寄せられるだろうという大きな期待を我々は持っている。

## 8. 1875年12月11日土曜日

## 文学ゴシップ

p. 792. (a) プロヴァンスの目新しい事柄がいくつか、アルルとアヴィニョンの現在盛んな文学に興味を抱く全ての人々から待望されているかもしれない。『ミレイヨ』〔1859〕と『カレングラウ』〔1867〕の著者にして、プロヴァンス・ルネサンスの首領であるフレデリック・ミストラル氏が、『黄金の島々』〔1876〕という題名で抒情詩集をまもなく出版するだろう。その詩の多くは既に個々によく知られている。そして二人のプロヴァンス語作家、フェリズ・グラ<sup>a)</sup>とタヴァン<sup>b)</sup>がそれぞれ、詩篇『炭焼きたち』と、韻文集『愛と涙』〔1876〕を準備している。

a) ママ。正しくはフェリックス・グラ（1844-1901）ルマニーユの義弟。マラルメはトゥールノン、アヴィニョン時代に知りあった。

b) アルフォンス・ダヴァン（1833-1905）プロヴァンスの農民詩人。

(b) もう一つの文芸雑誌が、『文芸共和国』の名で、パリで創刊されようとしている。それはカチュール・マンデス氏によって編集されるだろう。そして最初の数号には、フローベール、E・ド・ゴンクール、ルコント・ド・リール、ド・バンヴィル、ゾラ、クラデル、アルフォンス・ドーデといった各氏が寄稿することになろう。この雑誌は、最新的话题を扱うだけでなく、過去を振り返るものともなるのであり、1830年の初期ロマン派の時代のあまり知られていない、珍しい著作の幾つかに関する記事のシリーズを予告している。その目新しい特徴の一つは、スウィンバーン氏、オショネシー氏とその他フランス信奉者として知られるイギリスの若手作家たちが、寄稿を要請されているという事実だ。創刊号は今月の15日に発刊されることになっており、発行は、当初月刊だが、後に隔週刊行となろう。

(c) 上で取り上げたばかりの新しい定期刊行物の発行者、アルフォンス・ドレンヌ氏は、フランスの活版印刷によって実現され得る最高の仕上げを示す

ことを望んでおり、この目的のために、特別に作られたエルゼヴィル活字体で、最も豪華な紙に印刷された、『半獣神の午後』と題されるステファヌ・マラルメ氏による100行の詩を出版しようとしている。挿絵と芸術的装飾は、エドゥアール・マネ氏に委託されている。黒とピンクという二つの色合いで制作された氏のデザイン、カッ<sup>・</sup>ト<sup>・</sup>、花<sup>・</sup>形<sup>・</sup>などは、未だかつてヨーロッパにおいて試みられたことのなかった日本の方式を真似てなされるだろう。この文学的、芸術的珍品の部数は極めて限られたものとなるだろう。

## 9. 1876年1月1日土曜日

### 文学ゴシップ

p. 25. よく知られた建築家、ヴィオレ＝ル＝デュック氏<sup>a)</sup>は、『家の歴史』〔1873〕と『城塞都市の歴史』〔1874〕を書いた後、彼の『先史時代から現代に至る人間の住まいの歴史』〔1875〕の中で、もっと広い主題を扱っている。

a) ウージェーヌ＝エマニュエル・ヴィオレ＝ル＝デュック（1814-1869）有名な中世記念建造物の修復家。

## 10. 1876年1月8日土曜日

### 文学ゴシップ<sup>1)</sup>

p. 57. (a) ヴァクリー氏<sup>a)</sup>の『今日と明日』〔1875〕に関するスウィンバーン氏の記事が、ル・ペルティエ氏によってフランス語に翻訳され、仮綴本の形で出版されている。

a) オーギュスト・ヴァクリー（1819-1895）詩人、劇作家、ジャーナリスト。ユゴーの女婿シャルルの弟。ユゴーを生涯敬愛した。

### 音楽ゴシップ

p. 63. (b) テオフィル・ゴーチエは、死のほんの僅か前、自らの愉快的恋愛小説『カピテーヌ・フラカス』〔1863〕から歌劇<sup>オペラ</sup>を作るという恩典を或る

詩人と或る音楽家に託していた。この困難だが魅力的な仕事は今、『王の分け前』〔1872〕と『戦友』〔1873〕の著者、カチュール・マンデス氏と、ローマ賞受賞者にして『折れた枝』他の歌劇オペラの作者、エミール・ペサール氏<sup>a)</sup>によって成し遂げられた。その作品は、新歌劇場の管理者、ヴィゼンティーニ氏<sup>b)</sup>に受け入れられた。彼はこの呼び物を彼の劇場の柿落しこけらおとに見込んでおり、事務的な許可が下り次第、『ル・ディミトリ』〔1876〕と交互に上演し続けるだろう。

- 1) これら2つのテキストの元本を我々は所持していないが、少なくとも2番目のテキストはマラルメの手になるものと思われる。
- a) エミール・ルイ・フォルチュネ・ペサール (1843-1917) 教育者、作曲家。1866年にカンタータ『ダリラ』でローマ賞受賞。
- b) ルイ＝アルベール・ヴィゼンティーニ (1841-1896) 作曲家。オーケストラ指揮者。ゲーテ座の支配人。

## 11. 1876年1月15日土曜日

### 文学ゴシップ

p. 91. (a) バルベイ・ドルヴィイ氏は、そのよく知られた書『年老いた情婦』〔1851〕、『魔法にかけられた女』〔1855〕、『騎士デ・トゥーシュ』〔1863〕等は、今や殆ど古典になって、再版されつつあるが、『ダンディズムとG.ブランメルについて』〔1845〕なるエッセーを付け加えた〔1879〕。多くの興味深い、その名高い伊達男に関する未完と我々が信ずる詳細によって、この論文がイギリスの読者の関心を引くものになるであろう。

- (b) 『喚起』誌ラベルのエミール・ブレモン氏<sup>a)</sup>が、シェリーの演劇の仏訳をちょうど終えようとしているところだ。この巻の後、ブレモン氏は〔シェリーの〕抒情詩作品を翻訳するのを引き受けるだろう。
- a) エミール・ブレモン (1839-1927) 作家、詩人、劇作家。『文学・芸術振興』誌の主筆。

## 12. 1876年1月29日土曜日

### 文学ゴシップ

p. 163. テオフィル・ゴーチエの死〔1872〕以来、シャルバンティエ出版社のモーリス・ドレーフ氏は、新聞、アルバム、そして様々な短命の出版物を通してばら撒かれた、詩人の種々雑多な著作を蒐集する務めに根気強く専念してきた。それらの出版物では、著者が決してそれを避けようと努めなかったために詩人の著作は長い間ずっと忘れ去られたままだった。この紳士の注意深い調査のお蔭で、我々は既に『同時代人の肖像』〔1874〕、『芝居』〔1855〕、『ロマン主義の歴史』〔1874〕等を読むことができる。そして今や『全詩集』の表題でこれまでたった1巻を形成してきた詩作品の部分が、忘れ去られ未完だった作品の発見によって増補され、新版では2巻を満たすことになる。その第1巻は出たばかりだが、『アルベルトゥス』〔1832〕或いは『エスパーニャ』〔1845〕を巡って自然にまとめられた全ての詩が収められており、第2巻は目下印刷中で、『死の喜劇』〔1838〕を収め、全て1872年までをカバーする。『螺鈿七宝詩集』〔1852〕は相変わらず別に1巻を形成するだろう。元の序文、献辞、エピグラフは復元され、それに劣らず重要なことだが、詩人自身が自作品を分類した配列が厳密に守られることになろう。

## 13. 1876年2月5日土曜日

### 文学ゴシップ

p. 202. (a) しばらく前我々が取り上げ、恐らくその国際的組織に忠実な他のどの雑誌よりも大勢のパリ文学界の有名人寄稿者を擁する評論誌である『文学共和国』が、第2号で、ロシアの詩人プーシキンの、同国人ツルゲーン氏による幾つかの翻訳を出版している。第1号には、スウィンバーン氏による一詩篇の翻訳が載っており、第3号には「エレクテウス」〔1876〕の著者〔スウィンバーン〕による一篇の詩が原文で載ることになり、我々が誇りにしてよいイギリスの詩人〔スウィンバーン〕によって獲得された、フ

ランス語だけでなくフランスの韻律の例外的な熟達のもう一つの証明を与えてくれる。

(b) 現在フランスでは、政治が完全に皆を夢中にさせていて、文学には取り上げるべき新しい出来事はない。しかし、『世紀』紙は今でも、各号のかなりの部分を我々によってしばらく前に告げられたゾラによる小説『ウージェーヌ・ルーゴン閣下』に割くことができる。今、文芸欄にその掲載が始まったところである。この予備的な出版が、日刊新聞の中で発表されている間に出版禁止にする必要があると考えられてきた多くの部分があったとしても（そう我々は知らされているが）、結局全体が出版された際、その書の関心を減じることはないだろう。

(c) フランスの現代詩人アンドレ・ルモワヌ氏<sup>a)</sup>は、その韻文詩の幾つかがゴーチエの韻文詩との比較に耐えるかもしれないが、サンドーズ&フィッシュバシエール詩選集に、『海の風景と牧場の花と』〔1876〕という表題で、数年前に編纂された彼の全作品集へ追加する1巻を出版したばかりである。

a) アンドレ・ルモワヌ（1822-1907）高踏派詩人。本当に忘れ去られたマイナーな詩人。

### 芝居ゴシップ

p. 210 (d) フレデリック・ルメートルのための夜の興業が、先週の日曜日にロッシ氏によって組織され設定された。それは誠に悲しいことながら、たまたまこの偉大な俳優の葬儀〔死亡したのは1月26日、葬儀は1月28日〕の翌日に当たることになり、そのうちたった一部分のみ、即ちムネ＝シュリーによる幾篇かの素晴らしい韻文詩の朗読が、舞台上の代わりに墓所で行われた。しかしながら、記念公演が、惜しまれる芸術家の失った時間を慰めるには遅すぎるが、イタリア座だけでなく、ヴィゼンティーニ氏がその目的のために提供してくれた劇場であるゲーテ座でも、もっと大きな規模でそれでも行われるだろうと信ずる理由がある。そして、今やかくも例外的な荘厳さ

を獲得したこの式典は、他界した俳優の病気の費用を支払い、もしかすると  
弔いの記念物の最初の石を提供するという付加的な目的を持つことになる。

#### 14. 1876年2月12日土曜日

p. 226. 新刊フランス小説<sup>1)</sup>。

(この記事はマラルメのものではない。以下は2つの典型的な抜粋である。)

ドーデ氏によく話題にされる『ジャック』〔1876〕は、自分が私生児である  
ことによって打ちひしがれた、或る私生児の退屈で淫らな生活であることが  
わかる。着想は古く、ドーデ氏の場面構成によって新鮮な興味を与えられ  
ていない<sup>2)</sup>。

我々が論評した書物のいずれも、道徳的観点から非の打ちどころがないも  
のではなく、現在フランスで売られているもっと健康的なイギリス小説の仏  
訳の数が非常に増している (!)<sup>3)</sup>ことに我々は気づく。

1) リストは、とりわけ次の小説を含む。

ベルスモン塔 (ジョルジュ・サンド)、  
ジャック (A. ドーデ)、  
恐るべき秘密 (A. ベロと J. ドータン)、  
美しきソリニャック (J. クラルシー)、  
世界の旅籠屋 (H. マロ)、  
世界の中の結婚 (O. フィエ)、  
5分の恋 (A. ショール)、等。

2) 前出、序、p.13 及び註1を見よ〔ページは原註のまま〕。

3) ここには勝ち誇ったイギリスの独善が、全く無邪気に表わされている。

#### 芝居ゴシップ

p. 242. (a) 一篇ではなくて二篇の作品が、アメリカ独立100周年を記念  
してミカエリス氏によって開かれたコンペで勝利を得ることになった。一つ  
はダルトワ<sup>3)</sup>氏によるものであり、もう一つはオーギュスト・ヴィリエ・  
ド・リラダン氏による『新世界』〔1875〕と題するものだ。リラダン氏は詩

人であり、劇作家でもあって、文芸の世界で既に有名になっている幾つかの作品と関連して知られており、アメリカに行って、合衆国の全ての偉大な劇場で同時に彼の作品の上演を監督するつもりでいる。

- a) アルマン・ダルトワ（1845–1912）ガブリエル・ラファイユとの合作『偉大な市民』でコンクールに参加していた。

## 15. 1876年3月25日土曜日

### 文学ゴシップ

p. 430. 数週間前に我々が取り上げたゾラ氏の新しい小説が、今出版され、フランスで熱心に読まれているところだ。それは、著者の特徴的な分析の力と鋭さを示していると言われており、確かに近代小説の発展並びにその新分野における最も好奇心をそそる時代の一つ、即ち虚構が、ほぼ同時代なのでその書が歴史小説というよりはむしろ政治小説と呼ばれるに違いない出来事と問題に由来して、混ぜ合わされている歴史的要素の探索を記している。この小説家が自らの物語の主要人物たちの中に描いた第二帝政の典型の数々の下で、ナポレオン3世という中心人物の周辺に一つの集団を形成している様々な同時代の人物と、注目すべき正確さと効果をもって幾度かゾラ氏によって略述された皇帝自身に気付かざるを得ない。

## 16. 1876年4月1日土曜日

### 文学ゴシップ

p. 466. (a) 現在パリで読まれている小説の中で、マリユス・ルー氏<sup>a)</sup>による『姦夫』〔1875〕が取り上げられるかもしれない。彼はかなりの注目を浴びている若手作家であり、パリの習慣、とりわけカルチェ・ラタンの習慣を描くことにこれまで専念してきたが、今度は主題を田舎の生活から取っている。

- a) マリユス・ルー（1840–？）ゾラの幼友達。マラルメと親交を結ぶ。

## 芸術ゴシップ

p. 472. (b) エドゥアール・マネ氏は、フランス絵画における非常に進んだ写実主義の運動の首領、或いはもっと正確に言えばその開拓者としてよく知られ、外界の主題を厳密に戸外で制作する彼の習慣は、今年の官展への出展作品「ボート遊びをする人たち」で明瞭な、際立った成果を既に生んでおり、まもなくフランス芸術家協会によって展示されるべく、今年はその様式のさらに顕著な実例である「洗濯」という表題の絵を官展へ送る。それはほぼ等身大で、大変きれいなパリの庭で、青い服を着てリネンを洗う女性と、葉叢と、外気で乾かしている白い衣類と共に青い周りの背景を描いており、多数の花の中から浮かび上がってくる子供が見える。女性の姿は近くで画面いっぱいに広がる日光を浴び、謂わばその中に吸収される感じで、戸外の条件とマッチして、濃密であると同時にほんやりした外観を実現している。特に肉体の描写が光と周囲の環境の諸効果の最も独創的な研究の成果を示している。この作品は恐らく〈芸術〉の新しい特異な発展の最も貴重な例証の一つと見做されるだろう。

### 17. 1876年4月29日土曜日

(マラルメのものではない記事の抜粋。)

p. 595. ゴラ氏の新刊書は、既に我々の「文学ゴシップ」で取り上げている。この書は昨年、一昨年の彼の小説より劣っているが、同じくらいよく読まれるだろう。ド・モルニー氏<sup>a)</sup>、ルエール氏<sup>b)</sup>、そしてルイ・ナポレオン皇帝がその中に登場する——皇帝じきじきにである——、そして最もいかがわしい役割を演じさせられている。ド・モルニー氏と皇帝の個性は、力強く描かれており、片やルエール氏の個性は風刺されている。イギリスの嗜好では、その書は突飛なものであるが、突飛だとはいえ注意を要する。軽率な読者はプロとゴラを同類とみなすことがあるが、プロ氏が不道徳のための不道徳で、同時に迫力がないのに対して、ゴラ氏は力強さで大変な評判を得るだろうし、

たとえ彼の書が清らかなものだったとしても現在と同じようによく読まれるであろう。一言で言えば、ゾラ氏が道徳的腐敗を描くとするならば、それは概して本当の腐敗なのである。

- a) シャルル・オーギュスト・ルイ・ジョゼフ・ドモルニー（1811-1865）「ド・モルニー伯爵」のち「公爵」。七月王政から第二帝政にかけての資本家。政治家。
- b) ウージェーヌ・ルエール（1814-1884）法律家。政治家。第二帝政の主要人物。

## 18. 1876年8月19日土曜日

### 文学ゴシップ

p. 245. 我々のコラムで時折取り上げてきた『文芸共和国』は今、月刊から週刊へと発行形態を変えた。寄稿の高品質は着実に保たれている。スウィンバーン氏によるフランス語原作詩が近頃掲載され、7月の巻には『小さな女中』と称するカチュール・マンデスによる美しく短い散文田園詩が載っている<sup>1)</sup>。

- 1) このテキストと、続く3篇は、恐らくマラルメに触発されたものだが、原典は発見されていない。

## 19. 1876年10月7日土曜日

### 文学ゴシップ

p. 466. 『文芸共和国』の新シリーズ第2巻が今月1日から始まり、その前身の各号の品質に完全に匹敵するものになっているようである。仕上がったばかりの巻への寄稿の中に、ド・ボーヴィル [ママ<sup>a)</sup>]、フランソワ・コペ、ルコント・ド・リール、A. C. スウィンバーン、ステファヌ・マラルメ、カチュール・マンデスの各氏、その他大勢の同じく著名な人々の名前を目にする。

- a) 正しくは「バンヴィル」。

## 20. 1876年12月23日土曜日

### 文学ゴシップ

p. 836. (a) エドガー・ポーへの記念碑の「除幕式」が、昨年ボルチモアで開かれ、とりわけ、その行事の記録として記念の書を編集することに関係している人々に機会を提供してきた。この書はこのクリスマスに出版されることになっている。イギリスのポー校訂者イングラム氏によるポー略伝、個人的な友人たちの回想、欧米の卓越した文学者たち（その中には、より重要度は下がるが、例えば、テニソン、スウィンバーン、マラルメ、ブライアント、ローウェル、ホイッティアー、ホームズ、ホイットマン夫人、サククス、そしてウォルト・ホイットマンを含む）から記念委員会に送られた夥しい書簡と散文・韻文の寄稿作品、見事な肖像、複写原稿、イラスト、その他興味深いものが掲載される。

### 文学ゴシップ

(b) パリからポーに関連したもう一つの出版の準備も漏れ伝わってくる。マラルメ氏は、数年の間エドガー・ポーの全詩集の仏訳を準備することに専念してきており、この翻訳の幾つかの見本を『文芸共和国』誌に既に発表してきたが、今や全作品を印刷に回す準備ができています。新しい肖像画、独自の覚え書き、そして詩人の筆跡の複製が載るようだ。その書はホイットマン夫人に捧げられるだろう。ポー作品のニューヨークにおける出版者、ウィドルトン氏 [ママ] も、出版準備中の詩集の新版があるという話だ。デイディエ氏による詩人のもう一つの「独自の覚え書き」が前に置かれることになっており、新しい未知の資料もたくさん盛り込まれそうだ。

### 訳者後記

本稿は、マラルメが、イギリスの週刊文芸誌『アシニアム』*Athenaeum*に掲載すべく、当代フランス、とりわけ首都パリの芸術シーンをイギリス人向けに紹介する記事を、書簡の形で友人アーサー・オショネシー Arthur

O'Shaughnessy に送ったフランス語原稿を、その受け取り手であるオシヨネシーが英語に摘訳して、同誌の「ゴシップ」記事に挿入した一節を集めたものの邦訳である。したがって、この記事そのものから、マラルメの詩学なり、文体上の問題なりを抽出することはできない。しかし、詩人の浴していた芸術的環境クリマのようなものは見えてくる。なかには、現在では文学史上にも登場しないマイナーな名前も含まれており、不明の人物も多く、訳註は最小限しか付けていない。より詳しい註は底本のフランス語テキストのほうに付いているので、これを訳出する際に、この註も全訳するつもりである。

底本にしたテキストは以下の通りである。

*Les gossips de Mallarmé, Athenaeum 1875–1876, textes inédits, présentés et annotés par Henri Mondor et Lloyd James Austin, Paris : Gallimard, 1962, 117p.*

この中に掲載されたテキスト〔pp.79–105〕と、東京大学総合図書館に所蔵されている原本のマイクロ・フィルムを照合して確認作業を行った。各記事に付された頁は原本のものであり、上記の刊本には既にそのように記されている。

これはマラルメの手になるテキストそのものではないから、当然のことながらプレイアード版全集には採録されておらず、単行本としては、上記刊本が唯一のものである。しかも、なかにはマラルメのテキストが元になっていないという編者による断り書きが記された記事すら含まれている。よって、この翻訳は、マラルメ研究に大きく貢献するものではないが、傍系資料として提示する価値はあろうとの判断から訳出するに至った。従来から断っているように、私が近年続けてきた一連の翻訳作業は、元テキストがフランス語以外の言語で書かれたものであり、主として日本のマラルメ研究者を读者として想定している。その研究者諸賢が、この英語テキストを読めないとは思えないが、このテキスト自体があまり注目されることがないこともあり、こうして邦訳することで各位の目にも触れ、読みやすくなればと願うものである。

ところで昨今の日本におけるマラルメ研究は、一時の隆盛に若干翳りが見えてきた観は否めないものの、待望久しかった筑摩書房版『マラルメ全集』第1巻が、初回配本以来、20年近くの年月を費やして、漸くにして先頃陽の目を見たのは記憶に新しいところである。これは私から見て、二世代ほど前の人たちを中心にした労作である。その世代には、日本の仏文学界をリードする実力をもった先輩研究者たちが揃っていた。しかし、さすがに20年の年月の間には研究も深化し、先に出た第2巻、第3巻の中には手直しを必要とする部分も少なくない。私のようなマラルメ研究の裏街道を歩んできた者には、これに正面きってアンチ・テーゼを提示することよりも、これを補正していくことくらいしか目下のところ念頭にない。今回の翻訳もその一環である。

尚、通し番号は、上記刊本の編者によるものであり、脚註のうち、原註はアラビア数字で、訳註はアルファベットで記されている。刊本の体裁を尊重し、読みやすさを考えた結果、今回はこうした配置にしたことをお断りしておく。本文中に挿入された〔 〕は、訳者による補註であり、特に年代は判明したもののみ記してある。年代には諸説あるものもあり、訳者の責任で選択したが、誤りをご指摘賜りたい。

今回の翻訳も元のテキストが英語で書かれたものであることは上に述べた通りであるが、これは直接イギリスの読者の目に触れた形のテキストであった。しかし、最初から公刊されることを目的とせず、オショネシーに向けて情報の形で伝えられたフランス語テキストというものが背景にあり、それはマラルメの手になるものであるがゆえに、マラルメ研究の分脈ではむしろこちらのテキストのほうが問題とされる。これは研究者各位が原文で確認していただければよいのだが、テキストの比較研究という立場から、マラルメの書いたテキストそのものも翻訳しておくことが望ましいだろう。しかもこれは先に挙げた日本語版『マラルメ全集』の第2巻にその抄訳が掲げられているのみである。そこで私としては、次にこちらを全訳し、読者にどう伝えられたかではなくて、どう伝えられようとしたのかを考える材料を提示したいと考えている。